

ゐる。輝安鑛の含有平均二〇%の粗鑛は、小型ボールミルで粉碎し、分級機を経てジエームス型淘汰盤二基に依り平均含有量四〇%の精鑛となる。精鑛で輝安鑛の量が少いのは、黄鐵鑛が混入する爲である。一日半産内外を産出してゐる。

空山坑は大西坑の西北約五〇〇米に在る昭和九年九月開坑し、脈幅四乃至五糎、北四五度西に走り、東南に八五度の急傾斜をなす輝安鑛―石英脈に沿つて、二〇米程掘進したのであるが約一ヶ月の後其の探鑛を中止した。

#### 参考文献

- 1、比企忠、大和の辰砂鑛床、京都帝國大學工學部紀要、一卷、一四五頁、大正四年。
- 2、春本篤夫、上治寅次郎、近畿の地質鑛床斷片、地球、一卷、三四四頁、昭和四年。
- 3、村井一郎、大和水銀鑛山、日本鑛業會誌、四七卷、一六三頁、昭和六年。
- 4、川久保實太郎、鶴川平八郎、含稀元素鑛物の研究2、奈良縣宇陀郡神戸村産褐礫石、日本化學會誌、五六巻、一五二三頁、昭和十年。
- 5、稻井信雄、宇陀地方の水銀鑛床、京大卒業論文、昭和十

- 一年。
- 6、鶴川平八郎、大和神戸鑛山の鑛床(附神戸鑛山産黄鐵鑛結晶)、京大卒業論文、昭和十一年。

### 新著紹介

#### ○新撰北海道史

昭和十一年十二月印行 北海道廳

長友牧野信之助君を編輯長としてききに開道五十年の記念として道民の要望によつて出来た北海道史は其第一巻概況と第六巻を欠繼ぎ早に出版せられた、第一巻は第二巻より第四巻に至る通説總括とも見るべきもので、原稿は牧野君の一手になつたものである、第一章渡島と大和朝庭、第二章和人渡來と文化波及の序幕、第三章松前藩の確立と蝦夷地開發の狀勢、第四章松前藩政の頽廢と日露關係の急迫、第五章江戸幕府の直轄と日露關係の險惡、第六章松前氏の復領と幕府の再直轄、第七章明治維新直後の北海道經營、第八章開拓使十年計劃、第九章三縣一局と道廳時代、第十章明治より大正への十篇でずつと古代の渡島の開發から徳川時代北邊の警備をやかましく云つた時代に入り、明治をへて今日に至つた大觀が明にされてゐる。蓋し我國の地理學發達の道程に於て、北方の危急は特に我等の前人を刺激したので、こゝに北方探檢の時代もくれば、この地の測量といふ大事業も敢行された。

間宮林藏、近藤重藏、伊能忠敬諸先輩の業績はひとり日本

の地理學の進歩のみに止まらずこれによつて、世界の不明であつた東方の地圖が修正され完成されたことは誠に我等後人の模範であつた、我等は本書を讀むことによつて、當時の狀勢を明にすると共に先輩のいかに多くの英雄的、獻身的努力があつたかを知ることが出来る。本書挿入するところの五十個の圖版には或は明治天皇山阜屯田御通整圖をはじめ奉り古代の繩紋土器から、近世の江差松前屏風、露國使節の一行、高田屋嘉兵衛、松前崇廣の肖像其他いづれも眼のあたり當時を追懐せしむるの鮮明さであつて近時稀に見る好著であることと感じ喜びの情に堪へない。第六卷史料二は明治二年以後の開拓の經過をのべた資料で、新しい村落發達の研究資料として人文地理學上の好參考書であることは言を待たない。(藤田)

○文部省維新史所藏圖書目録

非賣品

昭和十一年三月末現在に於ける文部省維新史料編纂事務局所藏圖書の目録で菊版八〇八頁アイウエオ順に書目が配列してある、地理地圖に關したのも多い、大正十二年の大震災に殆ど全部を焼失したので、それから今日までに復舊につとめた結果であるが、火災前の目録でもあればと思はざるを得ない。(藤田)

○北平附近二萬五千分一地圖

國立北平研究院出版  
一幅定價一元

北平附近の二萬五千分一の實測圖が出来た、技師は佛人普意雅(ブイヤード・M. G. Boullard)氏である見本をみた

けであるが、森敷の中にある集村の散布せる有様とか北平城内にいかにも多くのグリーンがあるかなどいふことがよくわかる。紙は模造紙で印刷は鮮明である。コントロールは米突で入つてゐる、二十五米毎に曲線をいれ、三十米、三十五米、四十米四十五米等はすべて補助曲線即ち點線で入つてゐる、百米は計曲線でやゝ太い。何といつても廣い大陸の實測圖である。局部地圖としても參考にはなるであらう。(藤田)

○大川平三郎君傳

竹越與三郎著 昭和十一年九月發行

製紙王として名高かつた大川翁七十七歳の祝に同人の間に相談が出来て竹越三又翁の手にこの一卷が出来た、徳川末期から昭和の今日に至る社會史の方面に於て、いかに實業界が躍進したかといふことを知る珍らしい傳記である。同時に製紙の變遷を知つてバルブから水電に至るまで、紙一枚の仕事が遂に天下の財政に影響するに至ることを教えられる。併せて海運界の活動ともなり、上海での製紙工業なども大川氏の活動のうちにあつたことがわかる。蓋し時代の生んだ實業界の一つのかわやかしい丈夫の成功であつた。政治家や軍人が成功をうたはれるのも結構であるが、同時にかうした人の傳記に其幼年時代から青年時代への苦勞と修養があることを教えられるのは何よりである。(藤田)

雜

報